



# 門真四中だより

## 「つながる」「わかる」「切り拓く」

令和5(2023)年6月1日

第16号

編集・発行：校長 上甲 尚

### 「6月2日」は創立記念日

明日「6月2日」は四中の創立記念日です。この前の「四中だより」にも書きましたが、今年度から門真市の規則が改定され、すべての小・中学校で創立記念日は、通常授業を行うことになりました。すでに他の市でもそうなっている市がほとんどのようです。

四中は51年前の昭和47(1972)年4月1日、第二中学校から分離して開校しました。1年目は校舎の建設が間に合わず、プレハブ校舎でスタートしたそうです。当時は、爆発的に門真市の人口が増加し(全国的にも)、次々と小学校、中学校が建設されました。開校時の生徒数は347名でしたが、10年後の昭和57(1982)年には約4倍の1399名、通常学級33、支援学級3のマンモス校になりました。平成11(1999)年に大規模改修工事が行われ、現在の北館が完成し、校舎は2棟になりました。その後、緩やかに人口(子どもの数)が減少し、現在に至っています。「6月2日」が創立記念日なのは、すべての校地の契約が完了した日ということです。



〈創立10周年記念碑「和」〉



〈創立20周年記念碑「自立」〉



〈創立30周年記念碑「翔」〉



〈創立50周年記念プレート〉

ところで、左下の写真の記念碑がどこにあるか、知っていますか?なぜか40周年の記念碑だけが見当たりませんでした。当時、四中に教諭として勤務しておられた森川教頭先生に尋ねると、「きっとそんな余裕がなかったのではないのでしょうか?」という謎の回答でした???

この3月末で四中を卒業した人は、1万2988人を数えます。皆さんのお父さん、お母さんの中にもたくさん四中の卒業生がおられるのでしょね。そんな歴史と伝統のある四中も、3年後の令和8年3月末をもって閉校します。そして、新たに門真市立水桜学園として生まれ変わります。今の1年生の皆さんが最後の四中の卒業生ということになります。「有終の美を飾る」といいますが、みんなで力を合わせて、より良い四中をつくりあげて、後輩たちに引き継いでいきましょう。

### ひとつ拾えば、ひとつだけきれいになる



今週は生徒会執行部の提案で「無言清掃」に取り組んでいます。実行できていますか?「無言清掃」は、もともとお坊さんの修行に由来しているもののようです。心を落ち着け、気持ちを集中して掃除をすることで、効率も上がるし、さまざまな気付きも生まれます。

学校で児童・生徒が掃除をするのは、世界でも約3割ほどの国しかないという調査結果があります。掃除専門の業者に依頼している国もあります。自分たちが使った場所、生活や活動をする場所を自分たちの手できれいにするというのは、素晴らしい文化だと思います。日本に観光にやってくる外国人の方が感心し、口をそろえて言うことがあります。それは、ゴミがほとんど落ちていなくて街がきれいだということです。これは、学校で掃除をすることが当たり前になっている日本だからこそ、素晴らしい文化ではないかと思えます。

しかし、残念ながら一部にマナーが悪い人もいます。タバコの吸い殻を道端にポイ捨てする大人、コンビニの前でたむろして食い散らかし、そのままゴミを放置していく若者…。見ていてこれほど不愉快で迷惑なことはありません。そんな人たちは、学校で掃除をさぼっていたのでしょう。

鍵山秀三郎さんという方がおられます。イエローハットというカー用品会社の元社長さんで、「日本を美しくする会」というNPOの相談役を務めておられます。鍵山さんは社長時代、毎朝早く出社し、会社とその周辺を徹底的に掃除するという取り組みを何十年も続けられました。当初は「社長がそんなことをして…」と小馬鹿にする社員もいたそうです。

しかし、何を言われようと、鍵山さんは黙々と「掃除」を続けられました。その一生懸命な姿を見て、一緒に掃除をする社員が出てきました。すると、不思議なことに会社の業績も徐々に伸びていき、大きな会社になりました。今では、全社員で会社内や周辺を徹底的に掃除することが習慣になったそうです。鍵山さんの言葉を紹介します。

「ひとつ拾えば、ひとつだけきれいになる」私の思いを込めた言葉です。大切なことは、一步を踏み出す勇氣。一步を踏み出さなければ、前に進むことができません。具体的には、足元のゴミを拾う実践から始めることです。ゴミを拾う人は、不思議とゴミを捨てないものです。足元のゴミひとつ拾えぬほどの人間に、何ができましょうか。